網走市内公立高校の存続及び魅力向上に関する
協議成果とアクションプラン（ver.1.0）

令和８年３月
網走市教育委員会

１.趣旨

本件は、地域の中核となる網走南ケ丘高等学校（以下、「南ケ丘高校」という。）及び網走桂陽高等学校（以下、「桂陽高校」という。）の存続のため、生徒の市外流出に歯止めをかけるべく、行政と学校、保護者、地域が一体となり、両校の魅力向上・特色化と教育環境の整備等に関する協議を行った結果についてとりまとめたものである。

２.現状と課題

網走市内からは毎年、市外の私立高校へ20～30名、北見市をはじめとする市外の公立高校へ20名以上の生徒が流出している。この現状は、単なる市内生徒数の減少による高等学校の存続危機に留まらず、将来の地域経済を担う人材の喪失に直結する危急の課題である。

これらの課題の解決策を検討するために、網走市は令和７年６月に「網走市内の高等学校の在り方検討協議会」を設置し、これまでに８回の協議を重ねてきた。

生徒確保に向けた両校の課題として、南ケ丘高校では「進学校」としての機能向上が求められる一方、桂陽高校においては、地域に密着したまちづくりへの参画など、特色ある取り組みがある一方で、商業科及び事務情報科における定員割れが深刻化しており、従来の学科編成では存続が困難な局面にある。

地域の教育資源を維持し、市内における子どもたちの学びを保障するためには、南ケ丘高校の「進学」と桂陽高校の「地域に密着した探求・キャリア教育」という両校の役割分担をより明確化し、生徒に選ばれる高校であるための独自性を打ち出す必要がある。

３.両校の魅力向上に向けた協議経過

【委員名簿】

	氏　　名	所属団体・役職等	選出区分
1	千葉　　晋	東京農業大学生物産業学部学部長	学識経験者
2	杉本　匡規	網走商工会議所 会頭	経済関係団体の役員
3	佐藤　孝洋	網走南ケ丘高等学校PTA 会長	教育関係団体の役員
4	佐々木　由実	網走桂陽高等学校PTA 会長	教育関係団体の役員
5	與田　顕規	網走南ケ丘高等学校 校長	市内高等学校長
6	柴尾　尚文	網走桂陽高等学校 校長	市内高等学校長
7	木野村　寧	網走市教育委員会 教育長	網走市教育委員会教育長
8	秋葉　孝博	網走市企画総務部 部長	教育委員会が必要と認めた者

【協議会開催実績】

開催回数	年月日	議題
第1回	令和7年 6月30日	・協議会における検討内容と進め方について
第2回	令和7年 8月4日	・各校に設置する学科・教育課程等の検討 ・各校の特色の検討 ・課題の確認
第3回	令和7年 8月25日	・各校に設置する学科・教育課程等の検討 ・各校の特色の検討
第4回	令和7年 9月26日	・各校の学科・教育課程の具体化
第5回	令和7年10月17日	・各校の学科・教育課程の具体化 ・中高生向けアンケートの内容について
第6回	令和7年11月25日	・魅力化の取り組みの具体策について ・中高生向けアンケートの内容について
第7回	令和8年 1月19日	・魅力化の取り組みについて ・中高生向けアンケートの結果について
第8回	令和8年 2月20日	・今年度の協議内容の取りまとめについて ・次年度の協議について

４.二校存続に向けた魅力向上の方向性

南ケ丘高校については、これまで以上に「進学」に特化した体制を強化し、管内他校との競争力を高める必要がある。一方で、桂陽高校については、実社会での実践力を養う「地域に密着した探究学習とキャリアデザイン」に特化させ、両校の特色を明確に分けることで、生徒の多様なニーズに応える体制を整える。

特に桂陽高校においては、事務情報科を中心に定員割れが続いている状況であることから、学科やコースの抜本的な見直しが急務である。既存の商業科を「総合ビジネス科」や「観光デザイン科」等へ改編し、観光ガイド実習やボランティア活動といった地域資源を活かした探究型学習を教育の柱に据えるべきである。こうした地域密着型の活動に特化させることで、地域の受け皿としての高校を存続させる意義をより強固なものにできる。

また、高校・大学・専門学校を問わず、学習の価値は最終的な「就職先」という出口の明確さに集約される。本市の高校で学ぶことが、どのようなキャリアに直結するのかを可視化し、出口戦略を明確に打ち出すことで、管内他市への生徒流出を食い止め、地域とともに歩む高校教育の未来を確立することに繋がるものと考える。

５.ロードマップ

「網走市内の高等学校の在り方検討協議会」においては、今後の生徒数の減少に伴う「１～２間口の減少」を想定したうえで、二校を存続させるべく、両校の魅力向上策について検討した。また、数年の内に間口減少が示されることを想定し、早期から計画的に取り組むため、短期・中期・長期のマイルストーンを設定した。

（１）短期目標 ＝ 両校の維持（1～2間口の減少を想定）

この段階では、将来を見据え両校の役割分担を明確化する必要がある。

（南ケ丘高校）

南ケ丘高校の進学校としての魅力向上とオホーツク管内の地域性を考慮し、大手予備校との連携により、市外（管内）公立高校への進学者を抑制する。

（桂陽高校）

桂陽高校の既存学科（商業・事務情報）のカリキュラムを、地域産業と直結した「実践的探究型」へシフトし、中学生への訴求力を高める。また、地域との連携を強化し、市内企業のインターンシップなどキャリア教育の充実を図る。

（２）中期目標 ＝ 特色最大化と二校体制の再定義（2～3間口の減少を想定）

この段階では、「なぜ二校必要なのか」という本質的な意義を再定義する必要がある。

（桂陽高校）

① １校複数学科では出せない特色の整理

南ケ丘高校の「進学特化」と、桂陽高校の地域密着のキャリア形成による「社会実装や起業家精神」という、全く異なる校風（カルチャー）を分けることで、生徒が目的意識に合った環境を選択できる「多様性」を確保する。

② 学科転換のタイミング

桂陽高校が間口削減となるタイミングで、地域のニーズに即した「新学科」への転換を完了させる。

（３）長期目標＝ 二校体制による地域活性化

二校を存続させ、子どもたちが目指す進路に応じた高校を市内に保障することで、好循環を生み出す必要がある。

（南ケ丘高校）

オホーツク管内における進学校としての地位を確立し、管内から生徒を集め地域の生徒の自己実現と有用な人材の育成が図られる。

（桂陽高校）

地域に根差した取り組みと、生徒一人ひとりがキャリアを描く事のできるカリキュラムにより、生徒の自己実現と地域への人材還流が図られる。

６.南ケ丘高校の魅力向上のための具体的取り組み

南ケ丘高校が管内屈指の進学校としての地位を再確立し、管内他校への生徒の流出を食い止めるためには、「進学指導の高度化」と「部活動の戦略的強化」の二本柱による、他校にはない独自の価値創出を図る。

（１）進学指導体制の抜本的改革

現在の南ケ丘高校は、進学校としての特色が必ずしも十分とは言えず、近隣自治体の有力校との差別化が課題となっている。この状況を打破するため、大手予備校と連携したオンライン個別指導や夏冬の実地講習、進路指導など、従来の学校教育に予備校の専門性を融合させた新たな学習環境の構築を進める。特に、入試トレンドである総合型選抜に強みを持つ予備校を選定することで、多様化する大学入試への対応力を高める。

併せて、校内に「特進クラス」を設置し（最短で令和９年度）学力の更なる向上を図る。なお、通信授業等の単位認定にあたっては、道内の教職員による指導が必須となる法的制約を考慮し、教職員と外部コンテンツを最適に組み合わせたハイブリッド型の運用を目指す。オホーツク管内においては予備校連携の先例がない中、本施策の実現は極めて強力な訴求力となり得る。

（２）中高大連携による部活動の強化

部活動においても、南ケ丘高校にしかない強みを作ることで、中学生にとって魅力的な選択肢を提示する必要がある。その中核として、東京農業大学生物産業学部の硬式野球部等との連携を強化し、相互の負担を最適化しつつ、ハイレベルな指導を受けられる環境整備を図る。

また、弓道部や演劇部、放送局など全国大会常連の部局の宣伝や、すでに実施されているバドミントンやテニスにおける市内中学校との合同練習・体験会をさらに拡大し、中学生が「この部活動があるから南ケ丘へ行く」と思えるような、地域一体となった指導体制の構築を推進する。

７.桂陽高校の魅力向上の方向性

桂陽高校の再編にあたっては、従来の枠組みを維持するのではなく、生徒が自らの将来を主体的に描く「キャリアデザイン」を教育の中心に据える。全国的に「探究学習」が必須化される中で、独自の特色を打ち出すためには、学びを具体的な進路（出口）へ直結させる仕組みづくりが不可欠である。

（１）「キャリアデザイン」を軸とした学科再編と教育プログラム

これまで培ってきたボランティア活動や地域交流のノウハウを継承しつつ、「起業家コース」や「高度資格取得コース」といった、より出口の明確なカリキュラムへと昇華させる。複数の学科を漫然と維持するのではなく、地域課題の解決を学ぶ学科の機能を核として、実践的なキャリア教育に特化すべきである。

その象徴的な施策として、有名企業での長期インターンシップの導入、東京農業大学との連携による柔軟な教育課程の編成、企業での実習を単位として認定するなどの大胆な改革が必要である。単なる職場体験に留まらず、企業と高校生のマッチングを推進し、例えば「企業が大学進学費用を給付する代わりに、卒業後に市内企業へ就職する」といった、地元定着やUターンの呼び水となる商工会議所等との連携モデルの構築など考えていく必要がある。

（2）戦略的な生徒募集の方向性

本協議会では、今後の生徒確保に向けターゲット層に応じた以下の「3つのアプローチ」について検討した。

①全国募集：「地域みらい留学」を活用し、寮整備や専任コーディネーターの配置を通じて、網走ならではの「尖った」教育を求める層を呼び込む。
②道内募集：現在の商業科の枠組みを生かし、広域から専門性を求める生徒を募る。
③地域募集：市内および近隣町村の生徒に対し、明確な「達成感」を味わえる成功体験プログラムを提供することで、地元進学のインセンティブを高める。

①の「全国募集」については、相応の設備導入や専門家（外部指導者）との連携、そして財政措置等が不可欠である。特に、話題にのぼった漫画やアニメ、宇宙といった極端に特化した分野は、設備や指導者の確保が困難であり、慎重なストーリー設計が求められる。

多数の支持を得たのは③で、まずは生徒が「何を学びたいか」を自ら見つけられる環境を最優先に整備し、地元企業とのマッチングまでをパッケージ化した網走モデル」を確立し、持続可能な学校運営体制の構築を目指すべきであるとの意見が多数を占めた。

８.桂陽高校の魅力向上のための具体的取り組み

「7.桂陽高校の魅力向上の方向性」を踏まえ、桂陽高校の再編においては、学校側がこれまで培ってきた地域連携のノウハウを土台としつつ、そこに「商売のリアリティ」と「地域を動かす感動」を掛け合わせ、生徒の達成感・満足感を高めるプログラムを構築する。

（1）学科・カリキュラムの刷新と「学び直し」の保障

現在、地域貢献活動の中核を担っている商業科をベースに、探究学習とキャリアデザインに特化した「新学科」への改編を考える。既存の「商業科」という名称に捉われず、現代社会のニーズを反映した名称へ刷新することで、中学生への訴求力を高める。

また、多様な背景を持つ生徒の受け皿として、基礎学力を補完する「学び直し」の時間を教育課程に組み込み、誰もが自信を持って専門的な学びに進める体制を整える。

（2）「網走の文化」を動かす成功体験プログラムの創出

生徒が地域に関わる際、単なる「お手伝い」で終わらせず、主体的に企画・運営を担う「達成感と感動」の創出が不可欠である。その具体的なトライアルとして、網走の夏祭り花火大会において、一部の企画・演出を桂陽高校生に全面的に委ねるプロジェクト

を提案する。商工会議所等の協力のもと、生徒が自ら考え、地域の人々を感動させる経験は、教科書では得られない教育価値を生むはずである。これは「流氷・監獄」に次ぐ、新たな網走の観光資源や文化創出の端緒となる可能性を秘めており、地域社会にとっても大きな意義を持つ。

（３）多角的な外部連携によるキャリア形成

学びの幅を広げるため、企業や専門学校との戦略的提携を推進させる。産業界との連携では、有名企業へのインターンシップや、実際に商売（ビジネス）を体験するプログラムを通じ、働くことの厳しさと喜びを学ばせる。専門学校との連携では、ペット、ブライダル、理美容、eスポーツなど、生徒の関心が高い専門分野の講師を招聘し、多様な進路選択を支える。

（４）段階的な導入と地域意識の醸成

まずは現状における対策として「花火大会プロジェクト」や「専門学校連携」などの先行実施を検討する。こうした成功体験の積み重ねが、生徒の中　に「地域の一員として社会を動かしている」という意識を醸成し、結果として将　来的な地元定着やUターンへと繋がる可能性がある。生徒自身が「この学校でこれを成し遂げた」と誇れるエピソードを持つことこそが、選ばれる学校としての最大の強みになる。

９.令和8年度の重点取り組みと網走市による具体的支援

本協議会で検討した高校再編や魅力向上のビジョンを具現化するため、令和8年度より網走市が予算措置を講じ、以下の重点プロジェクトを始動させる。これは単なる学校支援ではなく、地域の教育環境の充実と、子どもたちにとって大切な高校生という時間を網走市で過ごすことによる、地域への愛着の醸成と次世代の人材を育むための戦略的投資と捉える。

【網走南ケ丘高校】～進学指導の高度化とブランド力強化～

（１）網走市支援予算 ＝ 高等学校魅力向上事業補助金（500万円）

管内トップクラスの進学校としての地位を確立にし、生徒の市外流出を抑制するため、大手予備校との戦略的連携による取り組みに対する補助を行う。

① 予備校コンテンツの導入

最新の入試情報を網羅したオンライン個別指導を導入し、地方に居ながらにして都市部と同等の高度な講義を受けられる体制を構築する。

② 集中講習の実施

長期休暇期間中に札幌校等での夏季・冬季講習への参加支援を行い、受験に向けたモチベーションの維持と学力向上を図る。

③ 専門家による伴走支援

予備校チューターと学校の教職員が連携し、生徒一人ひとりに最適化された進路サポートを実施する。

【網走桂陽高校】～地域一体型キャリア教育の推進～

（１）網走市支援予算 ＝ 花火大会魅力アップ補助金（100万円）

生徒の自己肯定感を高め、地域社会の担い手としての意識を醸成するため、実社会を舞台とした成功体験の場を確保するための補助を行う。

①「網走夏祭り花火大会」プロデュース事業

網走商工会議所の全面協力のもと、祭りの目玉である花火大会の企画・演出のうち「一枠」を全面的に生徒へ委ねる。予算管理からコンセプト立案、当日の運営に関わらせることで、座学では得られない「社会を動かす感動」を経験させる。

② 地域社会との接点創出

イベントの企画を通じて地域住民や専門家と深く関わり、実学としてのビジネスやホスピタリティを学ぶ機会を提供する。

【参考_（令和７年度）網走市から二校へのその他の支援】

（１）南ケ丘高校

・定時制生徒通学費補助　3,657千円

・定時制教育振興会補助　　90千円

（２）桂陽高校

・学生活動支援事業補助　50千円（商店街シャッターアート事業）

・市民活動活性化補助　　50千円（高校生と地域の子どもとの交流事業）

・郊外活動交通費補助　　30千円

１０.期待される効果と今後の展望

令和8年度の取り組みを契機として、南ケ丘高校は「高い進学実績と部活動強化」、桂陽高校は「豊かな人間性と地域貢献力」という独自のブランドの確立を目指す。これらの取り組みを通じ、生徒が将来的に網走市へ戻り、地域を支える好循環（Uターン現象）を生むための起点となることが期待される。本計画の遂行にあたっては、引き続き、学校・家庭・地域・行政が一体となり進めていくものとする。

１１.中高生アンケートの結果

【対象者】

・市内の中学３年生：257名

・高校生（市外（管内）の公立高校へ進学した高校１年生を含む）：790名

【アンケート手法】

・Googleフォームによる

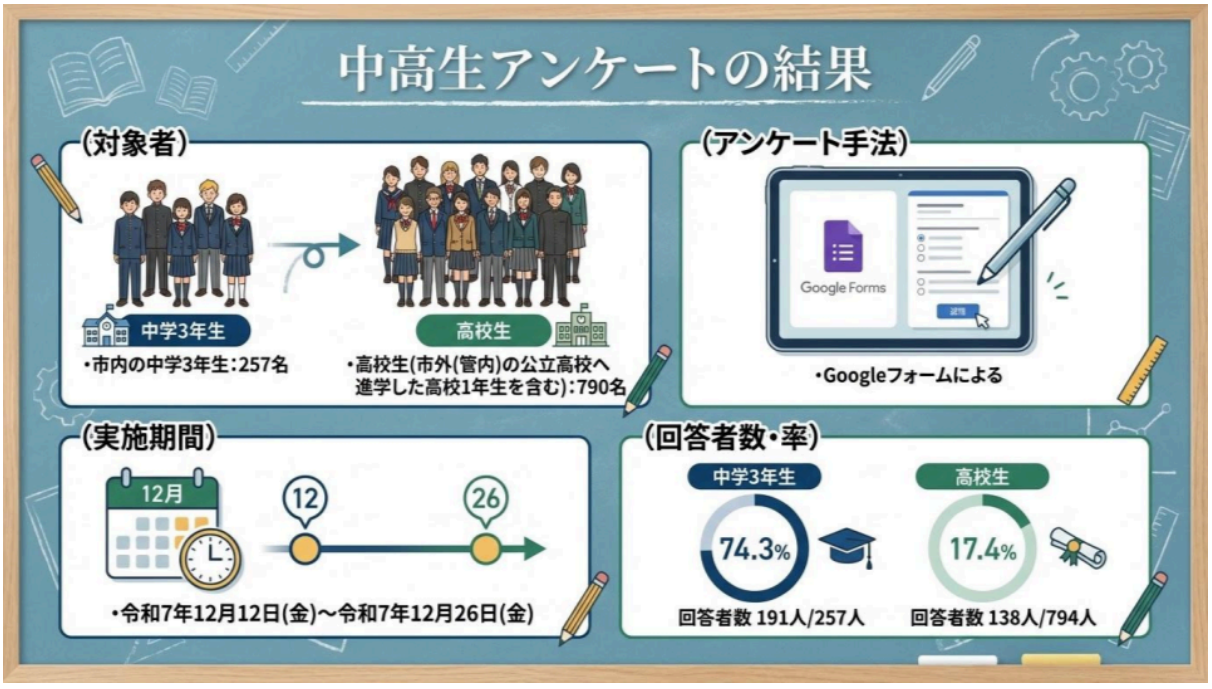
【実施期間】

・令和７年１２月１２日（金）～　令和７年１２月２６日（金）

【回答者数・率】

・中学３年生　回答者数　191人／257人（74.3%）

・高　校　生　回答者数　138人／794人（17.4%）



【中学３年生のアンケート結果】

（１）市内の高校への進学希望者(70.7%)

（２）市外の高校へ進学したい理由

① 部活動に魅力を感じたから（25.0%）

② 地元高校にない学科等で学びたいから（23.2%）

③ 地元高校よりも高い学力・進学実績の高校だから（17.9%）

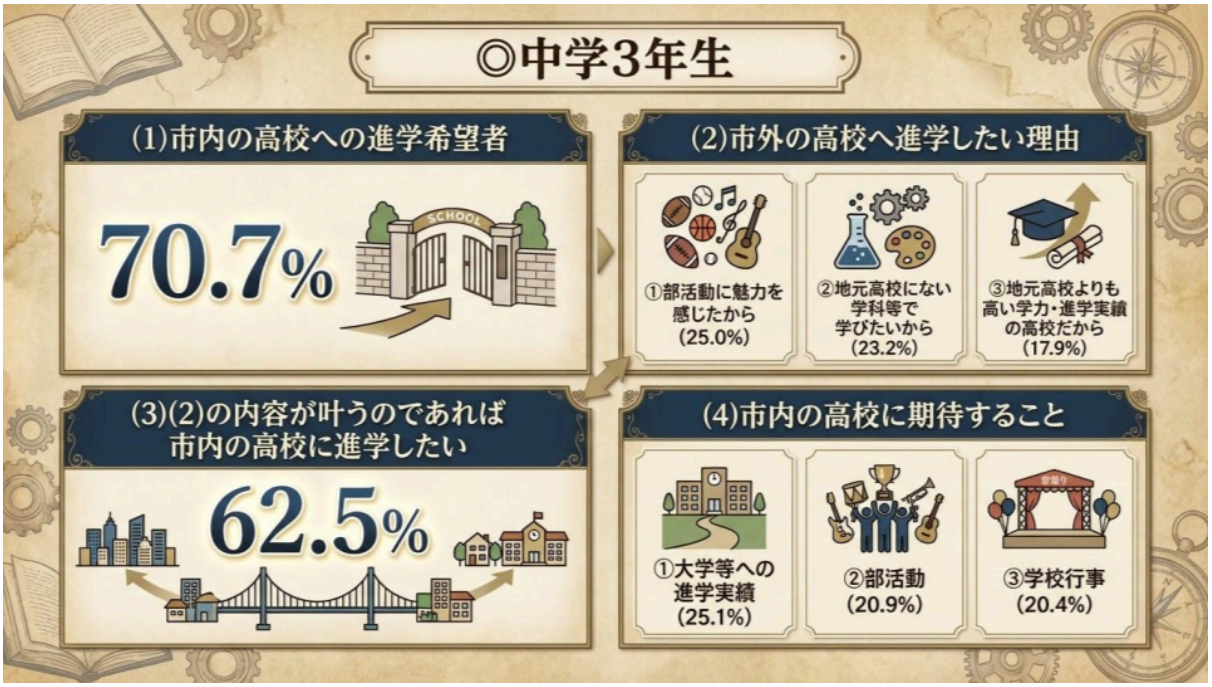
（３）(2)の内容が叶うのであれば市内の高校に進学したい（62.5%）

（４）市内の高校に期待すること

① 大学等への進学実績（25.1%）

② 部活動（20.9%）

③ 学校行事（20.4%）



（分析 ～中学生の流出を防ぐ鍵～）

中学生の約7割は市内進学を希望している、注目すべきは「市外を希望する層の約６割（62.5%）は、条件さえ合えば市内にとどまりたい」と考えている点である。

また、市外へ流出する主な要因については、次のような対策が必要である。

① 部活動の魅力（25.0%）＝市内高校の部活動の強化

② 専門的な学科（23.2%）＝既存学科の特色化や新設・改編の検討

③ 進学実績・学力（17.9%）＝ハイレベル層向けの特進クラス設置や塾との連携

【高校生アンケート結果】

（１）在籍高校は

① 市内（87.7%）

② 市外（12.3%）

（２）市内の高校を選んだ理由

① 通学しやすいから（32.2%）

② 学力に合っていたから（24.8%）

③ 進学に有利だから（11.6%）

（３）市外の高校を選んだ理由

① 部活動（41.2%）

② 地元の高校よりも高い学力・進学実績（23.5%）

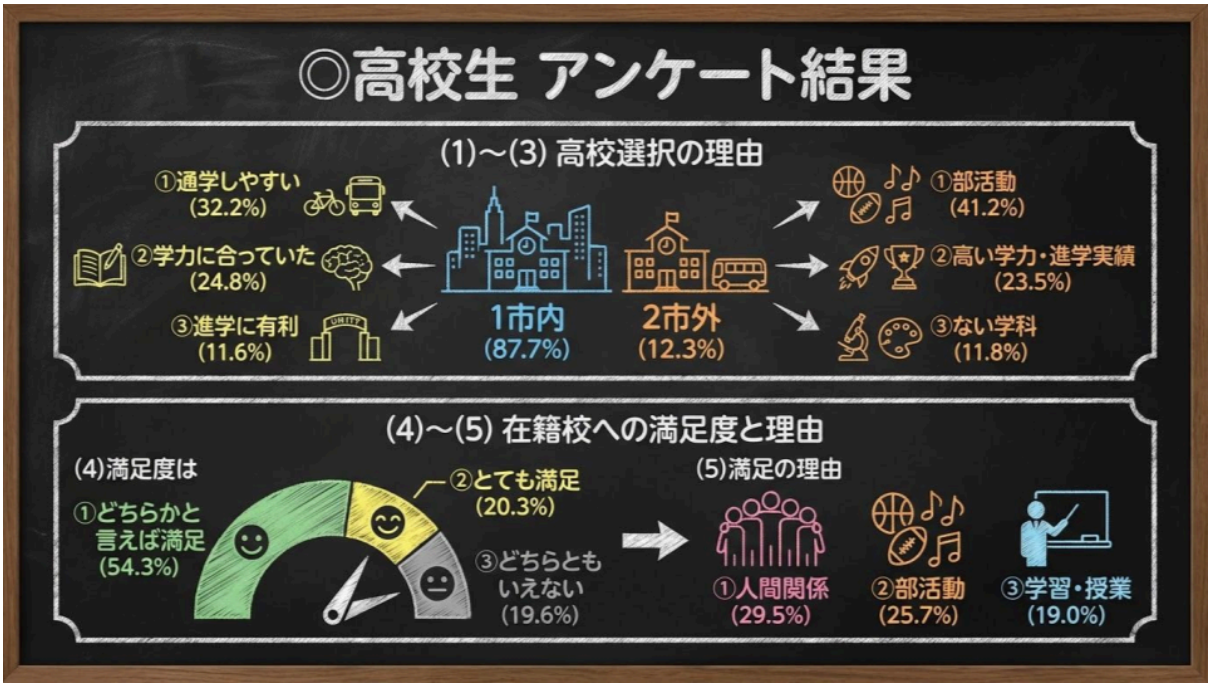
③ 地元の高校にない学科（11.8%）

（４）在籍校への満足度は

① どちらかと言えば満足（54.3%）

② とても満足（20.3%）

③ どちらともいえない（19.6%）



（分析 ～利便性で選び、人間関係で満足する～）

実際に市内の高校に通っている生徒の多くは「通いやすさ」という消去法に近い理由で選んでいるが、入学後の満足度は「人間関係」や「部活動」によって支えられている。

ポジティブな側面としては、満足度は高く約75%が「満足」側に振れているが、人間関係が満足理由のトップであり、学校が居場所として機能している。

ネガティブな側面としては、不満の筆頭は「校則」で、時代に合わせた校則の見直しが満足度向上になる可能性がある。進路指導への不満も一定数あり、より個別具体的なキャリア支援が求められる。

【高校生の現状と展望に関するアンケート結果】

（５）満足の理由

① 人間関係に関すること（29.5%）
② 部活動に関すること（25.7%）
③ 学習・授業に関すること（19.0%）

（６）不満の理由

① 校則・規則に関すること（28.6%）
② 進路指導・キャリア教育に関すること（21.4%）
③ 人間関係に関すること（14.3%）

（７）卒業後の進路

① 進学（72.5%）
② 就職（15.9%）
③ 未定（11.6%）

（８）在籍校で大手進学塾の授業を受けられるとしたら受けたいか

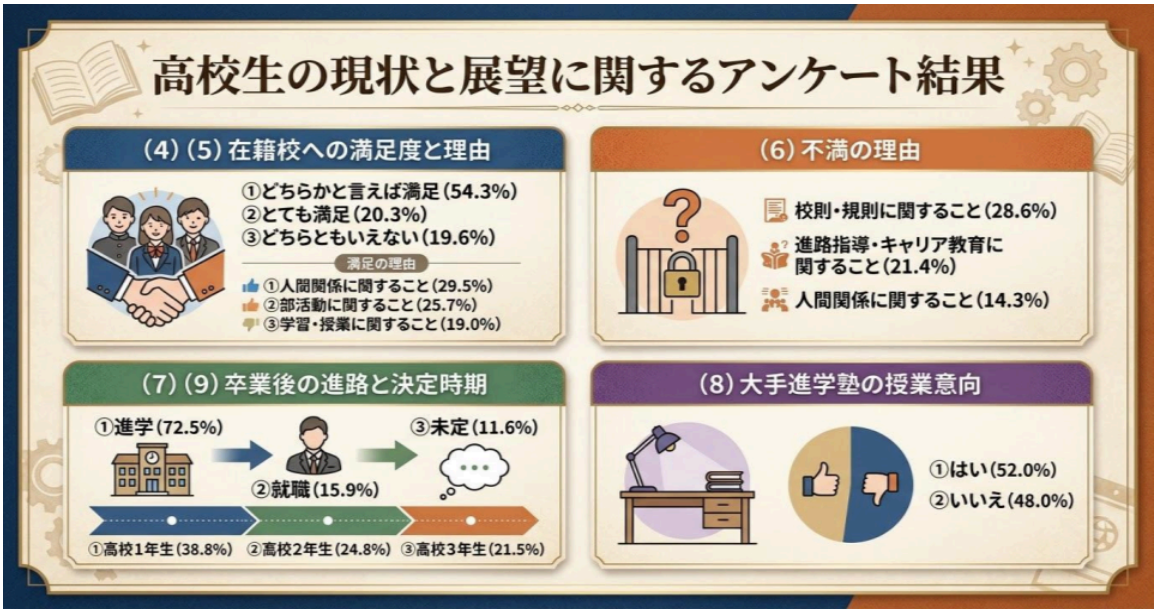
① はい（52.0%）
② いいえ（48.0%）

（９）卒業後の進路決定時期

① 高校１年生（38.8%）

② 高校２年生（24.8%）

③ 高校３年生（21.5%）



（分析 ～進学に対する強いニーズ～）

データ全体を通して、生徒たちの「進学意欲」の高さが際立つ。高校生の7割以上が進学を希望し、「校内で大手塾の授業を受けたい」という回答も過半数を占めている。高1時点で約4割が進路を決めており、早期からの学習環境整備が求められる。地元高校に「高い進学実績」と「大手塾レベルの講義」が備われば、学力上位層の市外流出に一定の歯止めをかけられる可能性がある。

１２.アンケート分析のまとめ

（１）進学実績の見える化と強化

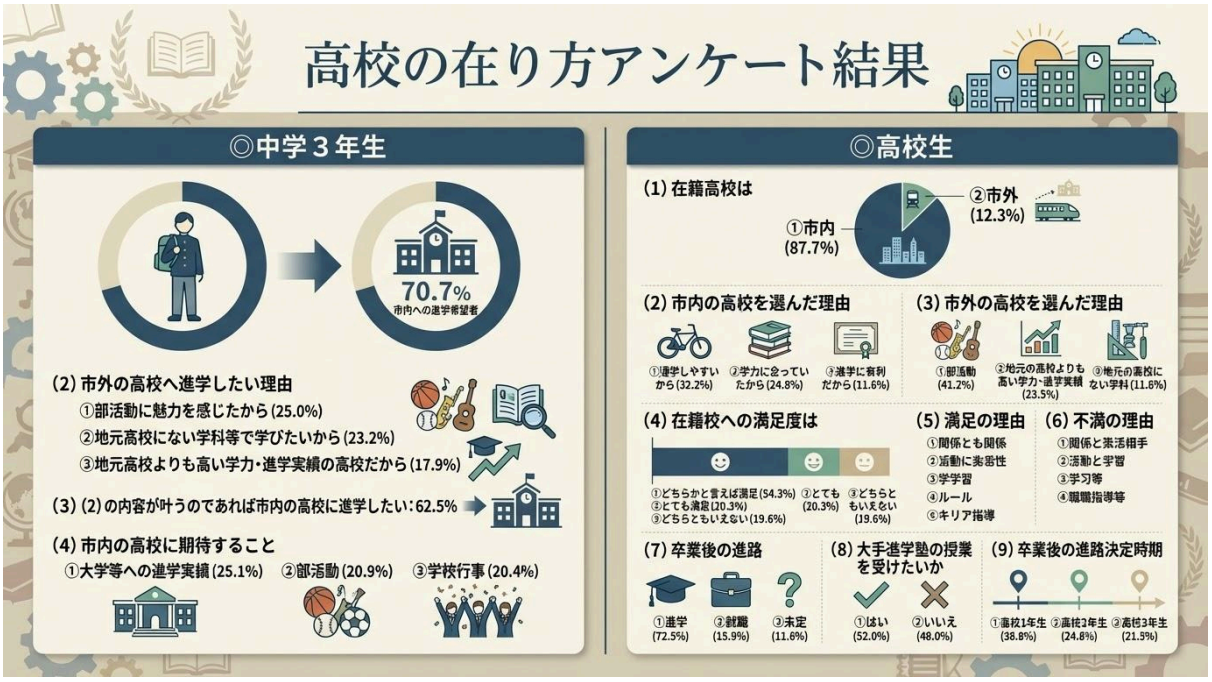
大手塾との提携（オンライン講義の導入など）は、生徒の半数以上が求めており、有効な施策になるのではないか。

（２）部活動の特色化

市外へ出る最大の理由が「部活動」であるため、特色を強化し「選ばれる理由」を作る必要があるのではないか。

（３）校則の柔軟化

生徒の不満1位である校則の見直しで、学校への愛着を高められないか。



１３.アンケート結果から見える魅力化プロジェクト「3つの柱」

（１）「大手塾との連携」による進学環境の底上げ

高校生の52.0%が「大手塾の授業を受けたい」と回答している点に着目し、放課後の校内に「スタディサプリ等の導入や大学生講師の配置」を検討し、通学の利便性（市内進学理由1位）を活かしつつ、市外の進学校に負けない学習環境を担保する。

（２）「部活動特区」の形成

市外流出の最大理由（中学生25.0%、高校生41.2%）である部活動を強化する。

重点強化部活を設定し、外部指導者の招聘や施設整備を集中投下し、「〇〇部なら市内のあの高校」という明確なブランドを作る。

（３）「校則・学校文化」のアップデート

高校生の不満1位（28.6%）である校則を、生徒主導で見直すプロジェクトの実施を検討する。「校則検討委員会」の設置や私服登校日の試行など、「自由で活気ある校風」をアピールし、進学実績以外のソフト面での魅力を創出する。